

山梨県北杜市明野町上神取  
諏訪原遺跡発掘調査概報  
2009年度



2009.12

昭和女子大学人間文化学部  
歴史文化学科

## 例　　言

1. 本書は、山梨県北杜市明野町上神取1558-1に所在する諏訪原遺跡の2009年度発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、2009年8月10日から22日まで実施した。
3. 発掘調査は、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が主体となり、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会の指導のもと、昭和女子大学人学院研究生・学部・短大学生が参加し実施された。
4. 発掘調査は、昭和女子大学人学院生活機構研究科教授 山本輝久・同人間文化学部歴史文化学科准教授 小泉玲子が担当した。
5. 発掘調査は、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2009年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡発掘調査を通じた体験型実習の実践」により実施された。
6. 調査原遺跡の発掘調査は今後とも、毎年、夏季休暇期間を利用して継続的に実施する予定である。
7. 発掘調査により発見された遺物は、現在、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科において保管中であるが、正式な発掘調査報告書が刊行されたあと、北杜市教育委員会に返還する予定である。
8. 本調査概報は、調査参加学生の協力を得て出土品整理および実測図面の整理・トレースを行い、山本輝久および人学院研究生・学部4年生の原稿にもとづき、小泉玲子と山本輝久がとりまとめた。
9. 発掘調査にあたっては、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会のご協力をえたほか、下記の方々からご指導いただいた。あつく感謝したい。

佐野 隆(北杜市教育委員会)、千葉 繁(慶應大学人学院博士課程後期)、大山祐喜(国際文化財株式会社)・大山かおり(新上五島町世界遺産推進室)、原田健司(松本市教育委員会)、植月 学(山梨県立博物館)・植月未来・下島綾美(慶應大学人学院博士課程前期)、櫛原功一(山梨文化財研究所)、阿部昭典(國學院大學)、早勢加奈(アム・プロモーション)、中島将太(杉並区教育委員会)、領家玲美(昭和女子大学人学院生活機構研究科博士課程3年)、多崎美沙(相模原市教育委員会)、江川真澄(相模原市教育委員会)、中村耕作(國學院大學人学院博士課程後期)

## 目　　次

1. 調査経緯	1
2. 遺跡の位置	2
3. 調査経過	3
4. 発見遺構と遺物	5
5. まとめ	17

## 挿図目次

図1 遺跡の位置	2	図6 SWU-PJ2号住 器台形土器	11
図2 調査地区全体図	4	図7 SWU-PJ3号住 石円炉址・4号上炕	
図3 SWU-PJ1号住 発掘現況図	6	掘り方	12
図4 SWU-PJ2号住 土層断面図	8	図8 SWU-PJ3号住 発掘現況図	13
図5 SWU-PJ2号住 発掘現況図	9	図9 SWU-PJ3号住 出土遺物	15

## 1. 調査経緯

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科は、2007(平成19)年度より、山梨県北杜市明野町上神取に所在する縄文時代中期の集落址である諏訪原遺跡の学術調査を開始した。

これまでの二次にわたる調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居址2軒、土坑、中世末から近世期と思われる道路状遺構等が確認され、多大な成果をあげることができた。その調査結果の概要については、別に報告済み(昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科編 2007・2008)があるので、それに譲るが、とくに、昨年度の調査では、土坑内から完全な形で底部穿孔された深鉢形土器が倒置状態で出土したほか、SWU-PJ1号住東壁壁際の床面上から器台形土器が出土するなど貴重な成果をあげることができた。

今年度は、SWU-PJ1号住とSWU-PJ2号住の調査が昨年度中途で終わったため、その継続的調査と、B-7グリッドの東隅に検出された長大な鉄平石が底面に敷かれた2号土坑の性格解明及び昨年度検出した2号土坑内底部穿孔倒置深鉢形土器が、住居址に伴うものなのか、屋外に埋設されたものなのかを明らかにするため、周辺部を掘り下げて精査を行うこととした。また、あわせて道路際の木調査区を拡張して調査を行うこととした。

調査の対象地は、諏訪原遺跡が所在する上神取集落内の上神取1558-1番地(土地所有者 村田勝海)の約700m<sup>2</sup>である。この調査対象地は、かつては養蚕のための桑畠であったが、現在は桑栽培は放棄され雑草地となっていた。昨年度の調査・埋戻し後、約1年間を経過して、再び雑草が繁茂していたため、北杜市教育委員にお願いして事前に草刈りをしていただくこととなった。

調査にあたっては、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2009年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡発掘調査を通じた体験型実習の実践」により実施することとなった。

今年度の調査は、これまでと同様、夏季休暇期間を利用して、8月9日現地設営、10~22日発掘調査、23日撤収の予定で調査を実施することとなった。参加学生は、今年度から5月当初に参加希望者を先着順で募り、応募のあった学生を参加させることとした。また、短期間であるが卒業生も参加することとなった。宿舎はこれまでと同様に、笛崎市穴山町にある旅館「穴山温泉能見荘」とし、遺跡現地への往復には、マイクロバスタクシーを利用することとした。このような経緯を経て、土地所有者である村田勝海氏の承諾をえて、北杜市教育委員会の指導のもと、発掘調査に至ったものである。



写真1 遺跡遠景 塩川右岸から



写真2 発掘開始前の現況 2009.8.10

## 2. 遺跡の位置

遺跡は、山梨県の北方に位置し、山梨県北杜市明野町（旧・北巨摩郡明野村）上神取1558-1番地に所在する（図1）。標高約550m、塩川左岸の河岸段丘面に広がる遺跡で、東側には標高1700mを越す茅ヶ岳・金ヶ岳の雄大な山麓が広がり、北西には八ヶ岳山麓、南西方向には、南アルプスの山々が望まれる風光明媚な場所に位置している。これまでの調査結果によると、「茅ヶ岳山麓でも最大級の規模を誇る」とされ、「遺跡の広がりは2万m<sup>2</sup>以上におよび、100軒を優に超える住居址が埋蔵されていると考えられる」（佐野 1996）、縄文時代中期の大規模な拠点的環状集落址である。

養蚕業不振により桑の栽培が放棄され、それに変わって、畑地への転化や宅地化が進みつつあり、そうした状況の中、桑の抜根による遺跡破壊に対処することを目的として、明野村教育委員会により、1992（平成4）年から2003（平成15）年にかけて8次にわたる発掘調査が断続的に行われてきた（佐野 1996・2003・04）。

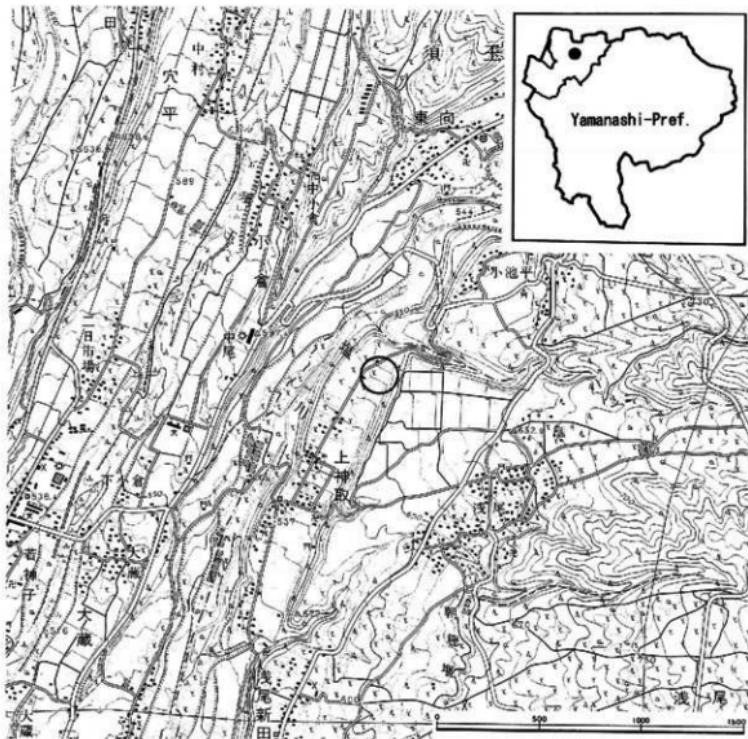


図1 遺跡の位置 1/25,000

### 3. 調査経過

調査はまず、昨年度調査が中途で終わったB-6・7、C-6グリッドの埋戻し土の除去を行った後、調査区西側の道路側、A-5・6・7グリッドに拡張区を設定した。また検出されているSWU-PJ1号住に存在すると思われるが址を確認するために、調査区限界近くまで、東側のD-6グリッド側に幅30cmの拡張区を設定した。このほか、B-7グリッドに昨年検出された長大な鉄平石を伴う2号土坑の精査を行うため、第1次調査後埋め戻してある、C-7グリッドの北西隅を2×2mの範囲で再発掘を行った(図2・写真3)。

SWU-PJ1号住は拡張区の掘り下げと、昨年度測量を終了している覆土中に認められた多量の礫石の除去後、壁の追求及び床面の全面出しと柱穴等の再確認を行った。残念ながら、今年度の調査期間内では、柱穴の完掘を含めて、住居址の調査は完了ができなかったので、来年度度完掘を目指したい。

SWU-PJ2号住は、昨年度住居址内で確認された、柱穴状のビット及び土坑状の落ち込みの調査を行った。今年度の調査結果から判断すると、遺構の複雑な重複が考えられることから、来年度の調査ではさらに掘り下げて遺構の性格を明らかにする予定である。

B-7グリッドに検出された2号土坑は、掘り下げを行ったところ、検出されていた長大な鉄平石は石圓が一部であることが判明し、SWU-PJ3号住と命名した。この調査結果から、昨年度検出されていた4号土坑内の底部穿孔倒置深鉢形土器は、この3号住に伴う可能性が強いものと思われる。確認された柱穴等の落ち込みは未調査のため、来年度継続して調査する予定である。  
(山本輝久)



写真3 発掘区の設定 写真右側が新たに設定した拡張区(A-5・6グリッド)

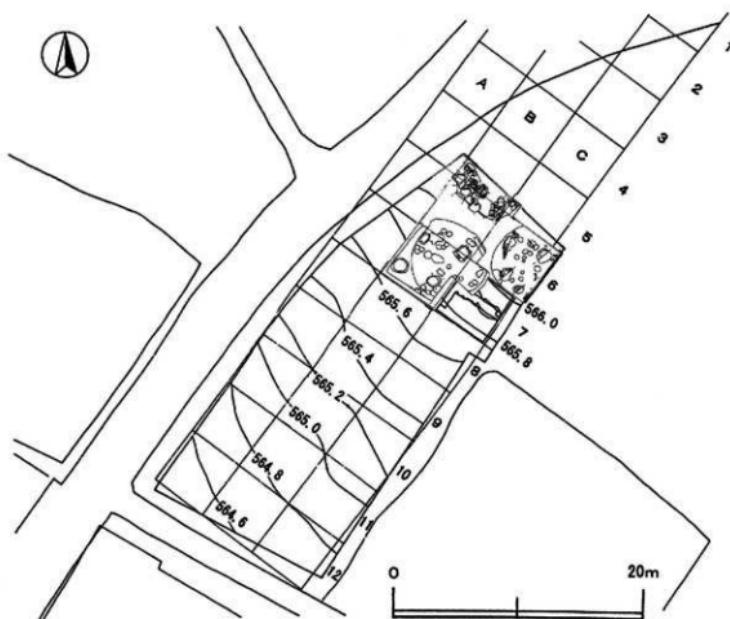


図2 調査地区全体図 1/400



写真4 調査風景

#### 4. 発見遺構と遺物

##### SWU-PJ1号住(図3、写真5～8・19～21)

C・D-6グリッドに検出されたSWU-PJ1号住は、昨年度の調査では住居床面検出と、周溝・柱穴などのプラン確認、穀群の実測とどった。本年度の調査では穀群を除去し、確認された住居址の柱穴・周溝等の調査を行い、住居址全体のプランを明らかにし完掘することを課題とした。

まず昨年度、住居内覆土に検出され実測した穀群の除去を行った。丸石や石皿片を含んでいることが認められていたが、石皿3点、磨石5点、丸石5点、くぼみ石2点、石斧1点、石器1点が出土した。

そして炉址を検出するために、D-6グリッド西側に30cm×5mの範囲を拡張し掘り下げを行ったが、新たに丸石やくぼみ石などが出土している。なお覆土中の穀群を取りあげたところ、P3北側の壁際に、棒状の石などが床面上から検出された。この時期にしばしば見られる、石柱・石壇施設の可能性もある。

昨年度の調査で検出された土坑などはプラン確認面までの調査にとどまっていたが、今年度の調査の結果、拡張部を含め調査終了段階での住居址の範囲は長軸約6m、短軸約5.5mのほぼ円形を呈し、壁高約27cmを測る。覆土上面より約26cmで床面を検出した。南東部から焼土硬化面を検出したが、炉址の検出には至らなかった。18ヶ所でピット状の落ち込みが確認でき、そのうち本年度調査を行ったのは5基のみで、1～5号ピットと命名し、半蔵まで調査を行った。確認されたピットの多くは柱穴と思われる。

P1はグリッド東部に位置する。平面形は円形と思われ、確認面からの深度は80cmを測る。覆土は6層からなる。この土坑からは結節繩文が施された土器が検出されている(写真20・21-16)。中期後葉・曾利式期と思われる。P2の深度は50cmで覆土は5層からなる。この土坑からは遺物の出土は見られなかった。P3はグリッド西部に位置し、深度は60cmを測り、4層からなる。覆土から土器片や石礫が検出された。P4はグリッド南西に位置し、深度は80cmを測り7層からなる。覆土上面から縄帶に刻目が施された底部から胴部下半部にかけての土器片が検出された(写真19)。井戸尻式期と思われる。P5はグリッド南部に位置し、深度は60cmを測り7層からなる。土器片や石礫が検出された。ピット等の出土遺物から、この住居址の時期は中期後葉・井戸尻式期に属すると思われる。

今年度の調査では穀群の除去と、ピット等の確認及び一部の半蔵までにとどまり、完掘にいたらなかった。来年度も引き続き調査を行い、完掘を目指したい。

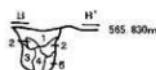
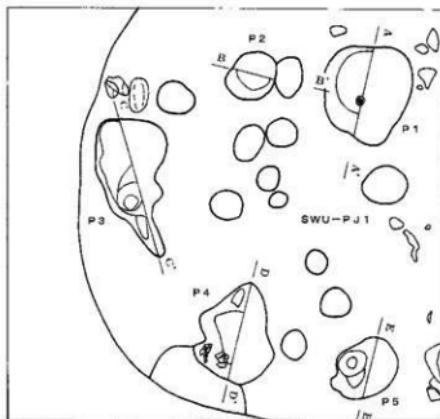
(大野節子)



写真5 SWU-PJ1号住の穀群の除去



写真6 SWU-PJ1号住 ピットの半蔵調査

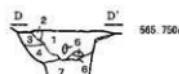
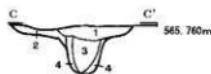


P1

- 1:10R2/3 黒褐色 白色粒 5%含む・褐色スコリア粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 2:10R3/4 嫌褐色 白色粒 2%含む。しまり・粘性あり  
 3:10R3/3 褐褐色 混合物 1%・白色粒 1%含む。しまり・粘性あり  
 4:10R3/3 嫌褐色 粘合物 1%・しまり・粘性あり  
 5:10R3/4 嫌褐色 2~3mmの褐色スコリア粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 6:10R2/3 黑褐色 2mmの白色粒 3%含む。5層よりしまり・粘性あり

P2

- 1:10R2/2 黒褐色 混合物・焦土を 1%含む。しまり・粘性あり  
 2:10R4/6 黄褐色 1~3mmの白色粒 3%含む。しまり・粘性あり  
 3:10R3/3 黑褐色 黒色ブロック 1%・黑色粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 4:10R4/3 黄褐色 3層に類似するが黒色土ブロックを含まない。しまり・粘性あり  
 5:10R3/3 黑褐色 4層に類似するが4層より堅くしまっている。しまり・粘性あり

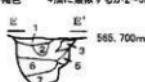


P3

- 1:10R2/4 嫌褐色 2~3mmの白色粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 2:10R3/4 黑褐色 混合物スコリア粒 3%含む。しまり・粘性あり  
 3:10R3/3 黑褐色 2~5mmの白色粒 3%・混化物含む。しまり・粘性あり  
 4:10R2/3 黑褐色 褐色スコリア粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 5:10R4/4 黄褐色 4層に類似するが2~5mmの白色粒含む。しまり・粘性あり

P4

- 1:10R2/3 黑褐色 2~5mmの白色粒 7%・2~3mmの褐色スコリア粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 2:10R4/4 黄褐色 1~2mmの白色粒 3%含む。しまり・粘性あり  
 3:10R4/3 黄褐色 2層に類似するが2~5mmの白色粒 5%・5mm角の混化物含む。しまり・粘性あり  
 4:10R3/3 黑褐色 2~3mmの白色粒 5%・ロームブロック含む。しまり・粘性あり  
 5:10R4/4 黄褐色 褐色スコリア粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 6:10R2/3 黑褐色 1層に類似するが1層より白色粒含まない。しまり・粘性あり  
 7:10R4/4 黄褐色 1~2mmの褐色スコリア粒 10%含む。しまり・粘性あり



P5

- 1:10R2/3 黑褐色 2~3mmの白色粒 3%・褐色スコリア粒 3%含む。しまり・粘性あり  
 2:10R3/3 嫌褐色 2~5mmの白色粒 3%・褐色スコリア粒 3%含む。しまり・粘性あり  
 3:10R4/4 黄褐色 褐色スコリア粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 4:10R2/3 黑褐色 褐色スコリア粒 10%・2~5mmの白色粒 3%・混化物含む。しまり・粘性あり  
 5:10R3/4 黑褐色 2~3mmの白色粒 3%含む。3層よりしまり・粘性あり  
 6:10R2/3 黑褐色 褐色スコリア粒 5%含む。しまり・粘性あり  
 7:10R2/4 黑褐色 2~5mmの黑色粒 5%含み6層より水分を含んでいる。しまり・粘性あり



図3 SWU-PJ 1号件 発掘現況図 1/60



写真7 SWU-PJ1号住 床面確認状況



写真8 SWU-PJ1号住 ピット半蔵状況

### SWU-PJ2号住(図4~6、写真9~14・21)

本住居址は、昨年度の調査では、東壁寄りに丸石とともに器台形土器(図6)が出土したことで注目されたが、床面と柱穴等の落ち込みの確認にとどまったため、本年度はその縦継調査を行った。また、A-5・6グリッド側に道路に沿って、掘振区約10.5mを設定し同時に発掘を行った。

住居址内から検出されたピット等の特徴をみると、P1は本住居址東側に検出されたピットで平面形は梢円形を呈する。確認面からの深度は約55cmを測り、底面は段丘疊層が認められた。このピットは柱穴と判断される。P2はP1の南側寄りに検出されたもので、長軸約1.8m×短軸約1mの梢円形を呈する土坑である。昨年度南壁際に検出されたL字状を呈する石組状の施設が検出されていたが、覆土上にも半たい河原石が敷かれた状態で確認された(写真10)。北側には柱穴状の落ち込みも見られ、十坑との重複も考えられるが、その性格は明らかではない。内部から井戸尻式期の土器片が出土している。

住居址西側には、広範囲の十坑状の落ち込みが昨年度確認され、別な住居址との重複も考えられたので、半蔵しつづけたところ、複数なピット等の重複が確認された(写真9・11)。P3は1号上坑とした落ち込みと重複するように検出されたもので住居址のほぼ中央部に位置している。平面形はほぼ円形で、最大深度は約40cmを測る。柱穴の可能性が強い。P4はP3の南側に検出され、AとBの2つのピットが重複している。Aは最大深度約35cm、Bは約60cmを測る。Aは柱穴と考えられるが、Bは内部から井戸尻式期の土器片が検出されており(写真14)、さらに南側に広がりが確認されたが、今年度は完掘に至らなかった。さらにP4と重複して検出された1号十坑は複数の土坑等が重複することが明らかとなった(写真9)。最大深度は約80cmを測る。内部からは土器片とともに打製石斧が出土している。2号上坑は住居址の西側に検出されたもので、半蔵するにとどまった(写真13)。上坑の上面には、上器の底部が出土している。また、昨年度確認された礫群と隣接しているが、この礫群は人為的なものではなく、段丘疊層が浮いて検出されているものと思われる。本住居址の所属時期は、これまでの出土遺物から判断して、中期中葉期に相当するものと思われる。

このように、本住居址は調査の結果、ピットや土坑が複雑に重複しており、複雑な様相を呈することが明らかとなつた。また、住居址の壁面が完全にとらえられていないことから、プラン・柱穴配置、規模等不明な点が多いので、来年度、周辺部を含めて調査を継続し、住居址の全貌を明らかにさせたい。(鑑田夏実)

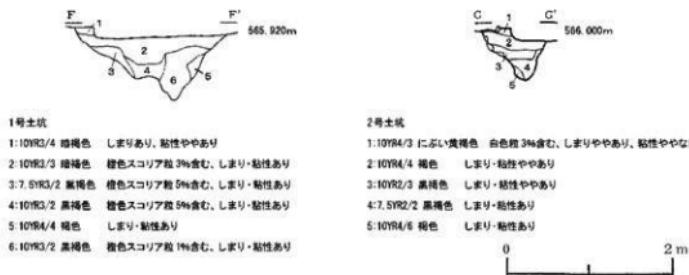


図4 SWU-PJ2号住 上層断面図 1/60

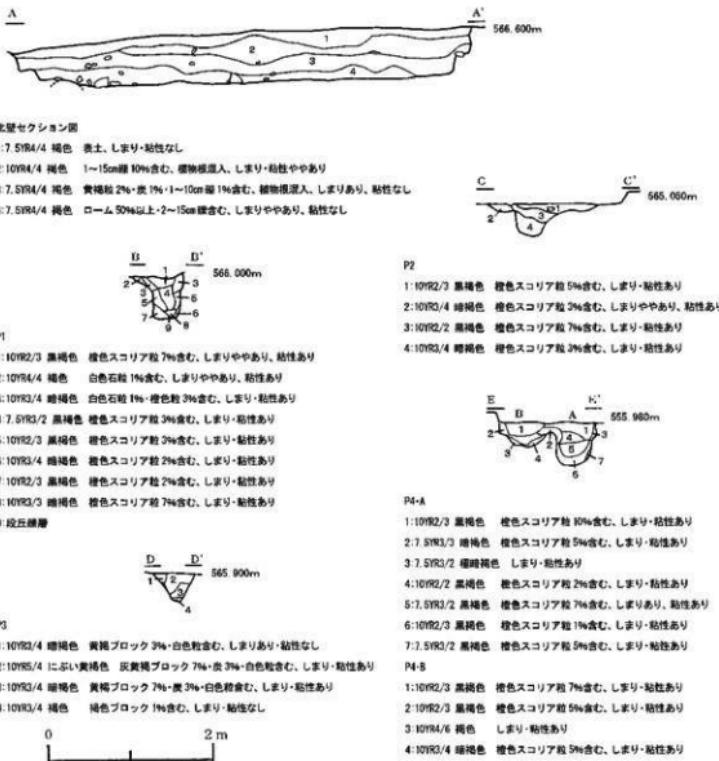
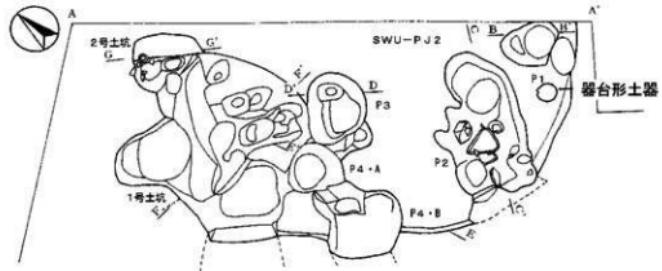


図 5 SWU-PJ 2 号住 実掘現況図 1/60



写真9 SWU-PJ 2号住



写真10 SWU-PJ 2号住 Pit 2



写真11 SWU-PJ 2号住 1号土坑 土層堆積状況



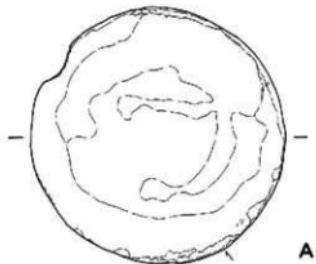
写真12 SWU-PJ 2号住 調査風景



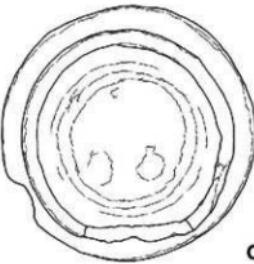
写真13 SWU-PJ 2号住 Pit 2半截状況



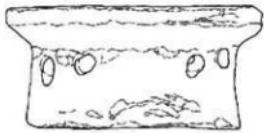
写真14 SWU-PJ 2号住 遺物出土状況



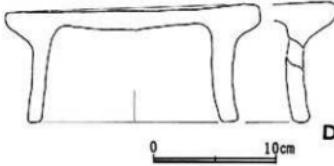
A



C



B



D

図6 SWU-PJ 2号住 器台形土器 1/4

### SWU-PJ 3号住(図7~9、写真15~18・21)

昨年度B-6・7グリッド間にまたがって発見された鉄平石を底面にもつ2号土坑の性格を解明するため周辺部を含めて掘り下げを行った。その結果、この鉄平石は方形の石閉炉址の一部であることが明らかとなつた。この石閉炉址(図7左、写真18)は約1.2×1.1mのほぼ正四角形を呈し、鉄平石で四隅を開っている。昨年度の調査で一部が発見されていた西側の鉄平石が最も長く、約1.2mを測る。一枚岩を用いているが、ほぼ真ん中あたりで折損している。また北と南側の炉石も一枚岩を用いているが、東側の炉石は二枚の鉄平石が用いられていた。とくに、南東コーナーには丸棒状の石が埋め込まれていた。この石閉炉址上面の覆土中からは多量の土器片が出土している。

この石閉炉址の発見により、略穴住居の存在が確実となったので、SWU-PJ 3号住と命名し、周辺部の調査を行い、壁の確認と床面の追求を行った。その結果、石匂炉の東側に壁の立ち上がりが確認されたため、2007年度に調査を行ったC-7グリッドの北西隅、およそ2×2mの範囲を再発掘を行い、ここでも略穴住居の壁が確認され、覆土中から土器片も多く出土した。壁の高さはおよそ30cm前後であった。

また、昨年度4号土坑内から検出された底部穿孔倒置深鉢形土器は、屋外の上坑に埋設されたものと判断していたが、今年度の調査の結果、SWU-PJ 3号住に伴う屋内埋設土器の可能性が強まつた。土器が埋設された4号土坑については、今年度掘り方平面断面図の作成を行つた(図7右)。長軸約1.1m×短軸約0.8m、深さ約0.7mを測る楕円形の土坑である。上坑内に埋設された底部穿孔倒置土器の実測図を図9-1に示した。ほぼ完全な曾利III式期に相当する深鉢形土器である。また、4号土坑に近接して35cm×56cmの鉄平石が確認されていたが、その側面を観察したところ四角く切り取られており、绳文時代のものとは考えにくい。

B-7グリッド部分では、壁の立ち上がりは確認されていないが、推定径約6m前後の円形プランを量するものと思われる。ほかに、昨年5号土坑の上面から出土した小形鉢形土器の実測図を示した(図9-2)。

以上のことから、本住居址は中期後葉曾利III式期の時期と判断される。来年度は、確認されている柱穴等の落ち込みを精査し、プラン全体を明らかにさせたい。

(高野 舞)

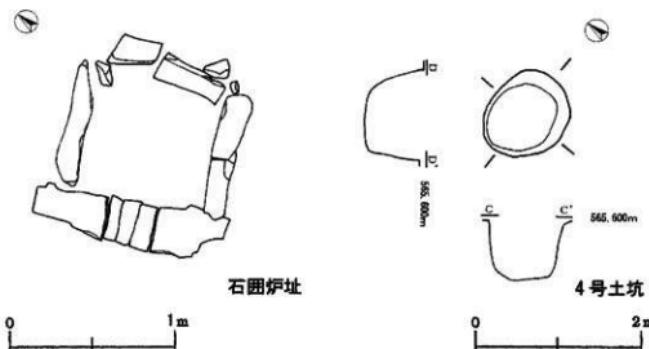
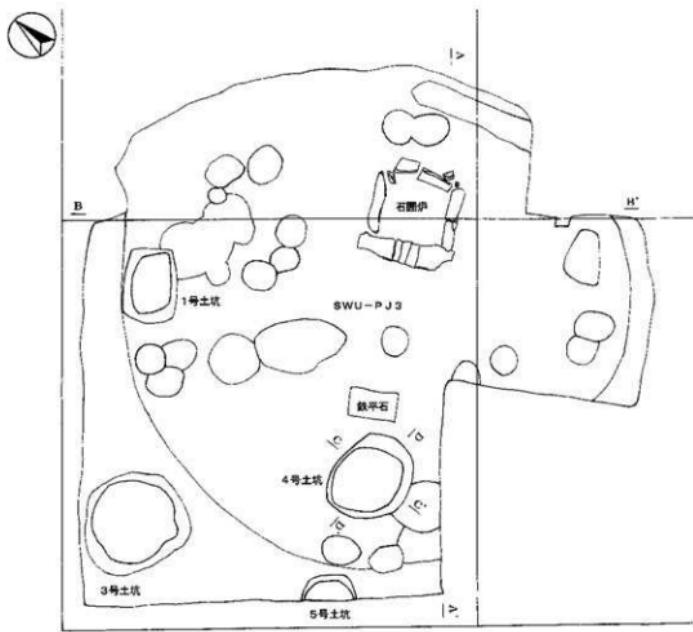


図7 SWU-PJ 3号住 石閉炉址(1/30)・4号土坑掘り方(1/60)



#### 南北ベルト

- 1:10YR4/4 棕褐色 しまり・粘性ややあり
- 2:10YR2/4 姬褐色 1m以下の白色スコリア粒1%含む。しまり・粘性ややあり
- 3:10YR2/3 黒褐色 1m以下の白色スコリア粒3%~5%以下の度物2%含む。しまりややあり、粘性あり
- 4:10YR2/3 姫褐色 3m以下のロームブロック2%含む。しまり・粘性あり
- 5:10YR4/4 棕色 1m以下の白色粒3%含む。しまり・粘性あり



#### 東西ベルト

- 1:10YR2/3 姫褐色 1m以下の白色粒2%含む。しまり・粘性ややあり
- 2:10YR2/4 姫褐色 3m以下の黑色スコリア粒3%含む。しまり・粘性ややあり
- 3:10YR2/3 姫褐色 2m以下の白色粒2%含む。しまりあり、粘性ややあり
- 4:10YR2/3 黑褐色 1m以下の白色スコリア粒5%含む。しまりあり、粘性ややあり
- 5:10YR4/4 棕色 1m以下の白色粒3%含む。しまり・粘性あり

図8 SWU-PJ 3号住 発掘現況図 1/60



写真15 SWU-PJ 3号住 土層堆積・遺物出土状況



写真16 SWU-PJ 3号住 南側から



写真17 SWU-PJ 3号住 西側から

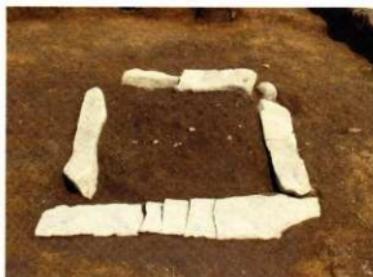


写真18 SWU-PJ 3号住 石圓炉址

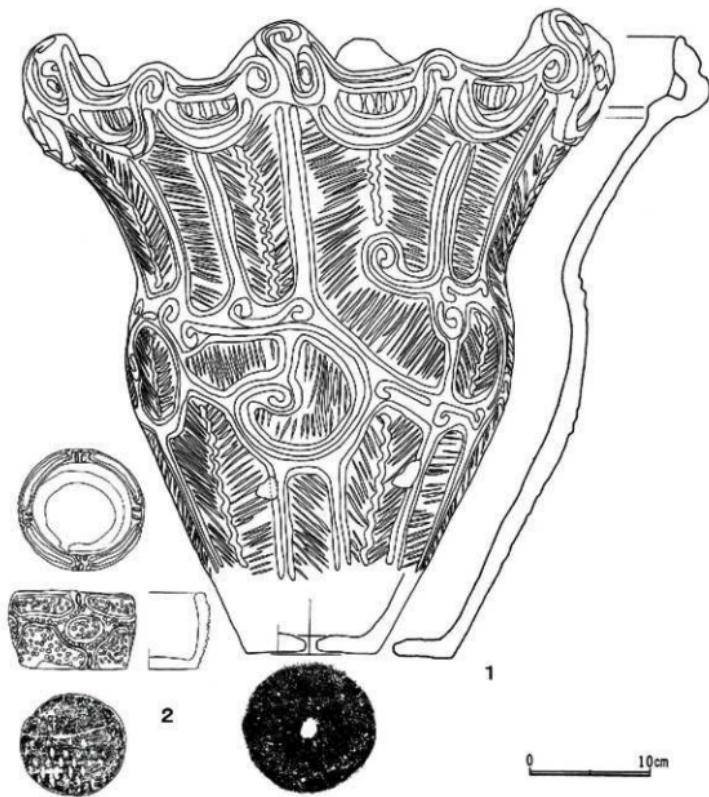


図9 SWU-PJ 3号住 出土遺物 1/4



写真19 SWU-PJ 1号住 Pit4 遺物出土状態



写真20 SWU-PJ 1号住 Pit1 遺物出土状態



写真21 主要出土遺物 1号住：1～4・6・7・12・16，2号住：5・11，3号住：8～10・13～15

## 5. まとめ

今年度の調査は、調査経緯と経過でも触れたように、これまでに検出され調査を行ってきた堅穴住居址・2軒の継続調査と、昨年度の調査で確認されていたB-7グリッド2号土坑と呼んだ底面に長大な鉄平石を伴う遺構をさらに精査し、その性格を明らかにすることを主眼とし、調査区西側にも拡張区を設定し、新たな遺構の検出を目指した。結果的には、時間の都合上、A-7グリッドに設定した拡張区は調査できずに終わってしまったので、来年度以降の調査で対応することとなつたが、今年度の調査でもいくつかの成果をあげることができた。

SWU-PJ1号住は、炉址が未検出であるため、東側調査区境界限界近くまで約30cm幅で拡張して調査したが、炉址の検出には至らず、境界の外側に存在することが予想された。今年度の調査では丸石を含む覆土中の礫・河原石を除去し、床面の精査・柱穴の確認、壁面出しを行った。その結果、北側の壁面はやや北側に広がることが判明した。また、確認された柱穴状のピットのうち、主柱穴と判断されるピットの半截を行った。今年度の調査では、断面図の作成まで、全截するには至らなかった。来年度未着手のピットを含めて完掘を目指したい。この住居址の時期は、ピットにかかるように出土した遺物から判断して、中期中葉・井戸尻式期と想定される。

SWU-PJ2号住は、北側が表土除去したさいの土盛りがあるため、約1/2の範囲に限られているが、本年度はプラン内に確認されていたピットや落ち込みの調査を行った。住居址西側の落ち込みは柱穴や土坑状の落ち込みが複雑に重複していた。また、東側では、昨年検出した器台形土器近くから、L字形状を呈する石組みと落ち込みが検出されていたが、これを精査したところ、長楕円形を呈し、底面に河原石や土器を伴う土坑状の遺構であることが判明した。出土土器は、井戸尻式期に相当する。この住居址の調査も中途で終わったため、来年度継続調査する予定である。

昨年度の調査でB-7グリッド2号土坑とした長大な鉄平石を伴う土坑とその周辺部を掘り下げたところ、大形の右囲が址であることが判明し、SWU-PJ3号住として調査を行った。この結果、昨年度土坑内に埋設状態で検出された底部穿孔倒置深鉢形土器は、この住居址に伴う可能性が強いものと思われる。今回の調査過程でも明らかとなった点であるが、これまでの調査は掘り下げ面が浅いため、遺構の確認が不十分であった。来年度以降の調査では、この点を反省して調査を継続してゆきたい。



写真22 跡訪原遺跡 小学生発掘体験 09.08.15



写真23 埋め戻し後の全景 09.08.23

### 調査参加者名簿

教 員 山本暉久(大学院生活機構研究科教授)・小泉玲子(人間文化学部歴史文化学科准教授)

助 手 石井寛子(人間文化学部歴史文化学科)

大学院研究生 石川真理子(生活機構研究科)・大野節子(生活機構研究科)

#### 歴史文化学科

学 部 生 4年 関さなめ・高野 舞・吉田沙織・阿部友紀子・井口真理子・鍛田夏実・倉島瑞季  
松木小枝・結城晶子

3年 飯島萌・大森恵子

2年 今井仁美・提間淡美理・堀越 涼・山田裕子・渡邊 恵・飯村えりか・佐藤未幸

1年 岡村 愛・清水志保・会田彩乃・會田成美・高野愛弓・中村美結紀

短 大 生 文化創造学科2年 小松沙織



写真24 前半参加者記念写真



写真25 後半参加者記念写真

### 諏訪原遺跡関連文献

佐野 隆 1996 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『年報－平成7年度－』 北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野 隆 2003 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成14年度年報－』 北巨摩郡市町村文化財  
担当者会

佐野 隆 2004 「発掘調査速報 諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成15年度年報－』 北巨摩郡市町村文化財  
担当者会

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2007 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報  
2007年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 編 2008 『山梨県北杜市明野町上神取 諏訪原遺跡発掘調査概報  
2008年度』

## 報告書抄録

ふりがな		やまなしけんほくとしあけのまちかみかんどり すわはらいせきはつくつちょうさがいほう						
書名	山梨県北杜市明斯町上神取 調訪原遺跡発掘調査概報 2009年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	山本輝久・小泉玲子・大野節子・飯田夏実・高野舞							
編集機関	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科							
所在地	〒154-8633 東京都世田谷区太子堂1-7 昭和女子大学 TEL 03 3411-5373							
発行年月日	西暦 2009年12月15日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
すわはらいせ き のまちかみか 調訪原遺跡	やまなしけん ほくとしあけ のまちかみか んどり 135 8-1	19-209	01-014	35度 48分 2秒	138度 26分 37秒	20090810 ~200908 22	約90m <sup>2</sup>	縄文時代遺跡状況調査 成程の研究にかかる 学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
調訪原遺跡	遺跡	縄文時代	堅穴住居址3、土坑3	縄文土器・土製品 石器	縄文時代中期の大規模遺跡調査址で、2007年度より、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が調査主体となって、中効率状態形成過程解明のため、学術発掘調査を継続している。本年度は、2008年度の調査を行った縄文時代中期の堅穴住居址2軒の継続調査および新たに確認された堅穴住居址及び土坑等の調査を行った。新たに検出された3号住居址は人形の石器が出土するのが特徴である。			



SWU-PJ 3号住居址 石岡炉址

山梨県北杜市明野町上神取  
諏訪原遺跡発掘調査概報  
2009年度

発行日 2009年12月15日

発行者 昭和女子大学人間文化学部  
歴史文化学科

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7

Tel 03-3411-5373

FAX 03-3411-7059

印刷 野崎印刷紙器株式会社